

【実践報告】

高等学校における映画を使った英語科授業実践 —生徒の英語リスニングの変容に焦点を当てて—

瀬島 沙紀（兵庫教育大学大学院）

本研究の目的は、実践報告を通じて、学校現場におけるリスニング力向上のための映画の活用方法とその効果を示すことである。大学入試共通テストでは、従来に比べ、リスニングの配点が高くなり、高校生にとってより一層リスニング力の必要性が高まりつつあるといえる。しかしながら、授業内において、教科書以外の英語を聞く機会がほとんどないことや（ベネッセ, 2014）、生徒にリスニング技術やストラテジーの指導をしている教員があまりいないといったこともあり（米津, 2018）、リスニングに苦手意識を抱く高校生は多い。そこで本実践では、多岐に分けられるリスニング技能の中でも特に、日本人英語学習者のリスニングにおける課題の1つである音声変化の認識力の向上に焦点を当てた。リスニング教材として、使用場面が一目でわかるだけでなく、様々な話者の音声変化を学ぶことができる映画を使用した。また映画教材は、英語学習に対する情意面の向上も期待できる（e.g., 菊池・山中, 2006; 近藤, 2018）。本研究では、公立高等学校の2年生の選択科目の英語の授業で実施し、当該授業を履修している15名に対し、6週間、計10回にわたり映画を用いた授業を行った。使用映画は「ベイマックス」(2014)で、計102分の映画を10回に分割し、10回の授業を通してすべてのシーンを視聴した。本時の視聴動画の中から抜粋した約1分間のシーンを用い、ディクテーション活動や音読活動を実施し、音声変化の指導を行った。指導の効果を検証するために、指導前後のリスニングに関わる質問紙調査質と各授業の振り返りコメントをもとに、映画を使用した授業による生徒の変容を調査した。

【実践報告】

コロナ禍におけるオンライン TOEIC® L&R テスト対策授業 —振り返りと映像メディアを使用した今後のオンライン授業の可能性—

福井美奈子（京都産業大学）

本発表の目的は、コロナ禍で実施されたオンライン TOEIC® L&R テスト（以後「TOEIC」とする）対策授業を受講した大学生が、授業についてどのように感じどのように取り組んだのかをアンケート調査から取得したデータを基に明らかにすることである。また、調査結果を踏まえ、コロナ禍以降におけるオンライン TOEIC 対策授業の可能性を模索することである。

2020 年度の春学期に混乱と共にスタートしたコロナ禍に端を発する大学教育におけるオンライン授業の提供は、早くも約 3 年が経ちすっかり定着してしまった。今後、コロナ禍がすっかり過ぎ去ってしまった時、オンライン授業は廃れてしまうのだろうか。あるいは対面授業と並行して何らかの形式で存続していくのだろうか。一例として、名古屋商科大学は、2023 年 4 月に経営学部オンライン授業のみで卒業できる新コースを作る。また、大阪公立大学はオンライン協働学習教育を採用し、海外の学生との協働を重視する授業を実施している。このように、大学教育におけるオンライン授業の位置づけにはコロナ禍の困難な状況の下でスタートしたものとは異なるものが見られ、今後もこの流れが継続すると考えられるとすると、TOEIC 対策授業においてはどのようなものが提供可能であるだろうか。

発表者は、ある大学にて TOEIC 対策授業を受講したことがある学生を対象にアンケート調査を実施した。調査の結果、約 7 割の学生が対面授業を好むものの、約 4 割の学生がオンライン授業における授業内容の理解度については対面授業と遜色なかったと回答した。このことから、コロナ禍において不可避免的にオンラインで提供された TOEIC 対策授業がある程度機能していたことがわかる。発表ではアンケート調査結果を詳細に明らかにし、コロナ禍で実施されたオンライン TOEIC 対策授業を振り返る。そして、対面授業で生じがちな指導上の問題を解決できるような、未来に向けたオンライン授業の可能性を映像メディアの使用と共に述べたい。

【研究発表】

映画を用いた英語科教育における任意的な語順の入れ替えの指導法

杉浦理泰（岐阜大学大学院）

本発表の目的は、任意的な語順の入れ替えの一例である話題化と主語補語倒置に関して、英語科教育における指導法を提案することである。

英語において、*A muffin, I ate.*といった話題化や *Great was her surprise when she heard the news.*といった主語補語倒置など、「主語+動詞」ではない語順になる特殊な構文が存在する。これらの文においては、語順の入れ替えは任意的なものであるため、周辺的な現象というイメージを持たれているという指摘がある (e.g. 北村 2019)。また、学習指導要領にも指導するような記載が確認できないことから、現在の英語科教育では、重点的に指導されていない。しかし、任意的な語順の入れ替えは、話者の意図や焦点に当てたい内容を忠実に反映させる効果があり、学習者のコミュニケーション能力の育成に貢献すると考えられる。

このような事実から、任意的な語順の入れ替えの指導の充実を主張する先行研究は少ない(e.g. 岡田 2012, 中川 2019)。とりわけ、岡田 (2012) では、これらの現象の指導の際、現象が起きている単文のみを提示し前後の文脈を提示しない単文主義では、学習者が任意的な語順の入れ替えを十分に理解できない可能性を指摘している。

本発表では、この岡田(2012)の主張を支持し議論を行う。まずは話題化と主語補語倒置の文が、現在の中学・高等学校の英語科教育においてどのように扱われているかを確認する。そのうえで、当該構文を日本の英語科教育で指導すべき根拠を、それらの文の実用性と学習者のコミュニケーション能力の育成の2点から示す。それを踏まえて、より具体的な指導法として、文脈を用いた当該現象の提示を提案する。その際、映画 *The Devil Wears Prada* (2010) や海外ドラマ *The Good Wife* (2010) などを使いながら、映画やドラマで話題化や主語補語倒置を提示する方法が、学習者の任意的な語順の入れ替えに対する理解を促す際に効果的であることを示す。

【研究発表】

映画の中の場所句倒置構文

山縣節子（フリーランス）

『グローリー 明日への行進』などの映画作品から場所句倒置構文の使用例を収集し、当該構文が選択される場面とその背景について考察を行う。Huddleston and Pullum (2002) が指摘する当該構文の特徴を概観し、各作品の使用場面と照らし合わせながら、場所句倒置構文の本質的な役割について論じていく。Huddleston and Pullum (2002:1388) が、“Inversions ... have a strongly literary flavour.”と指摘するように、本構文の文体には文学的な趣が強く見られる。実際の映画データでは、場所句倒置構文は語りの場面が中心となり、話し手が語り手、ナレーターとして認識されている。使用頻度は他構文に比べて低くなるが、実際の映画の使用例では子どもの発話もあり、場所句倒置構文の使用は一部日常的な場面でも見受けられる。映画の中では、概して、主語の存在と位置情報が重要性を帯びているシーンで使用されており、その事実は本稿での映画データより裏付けられる。使用頻度が相対的に低い場所句倒置構文は、映画の中でポイントとなる情報を指し示すマーカーとして、その役割を果たしていると考えられる。本発表の帰結として場所句倒置構文は、古風 (old-fashioned)—文学的 (literary) —硬さ (formal) —日常的 (ordinary) のスケールをもとに解釈が行われている点を論証する。

【研究発表】

映像メディアに見る垣根表現

衛藤圭一（京都外国語短期大学）

コミュニケーションにおいて、直接的な物言いにならないよう通例は「申し訳ないのですが」や「お言葉を返すようですが」などの枕詞が置かれるが、日本語だけではなく英語にも枕詞に相当する「垣根表現」が存在する。一般的には *perhaps* や *I'm afraid* などが知られており、通常は婉曲的、あるいは丁寧な響きを与えたり、話者の控えめな気持ちを表したりする際に用いられるが、こうした語句以外にも条件節が垣根表現として機能することがある。本発表では、条件節を垣根表現として使う場合を取り上げ、指導する上で注目させるべき用法の特徴を2点示すことを目的とする。1つは、主節に仮定法の助動詞を伴う点である。今1つの特徴は、条件節の中に助動詞が生起するという点である。この2点に関連して、本発表では他に注意すべき点等も示していくことにしたい。さらに、*Kramer vs. Kramer* (1979) や *24 season 2* (2002) 等の映画や海外ドラマを通じて、映像メディアが垣根表現に対する学習者の理解を促す上で効果が高いことを示す。

【企画ワークショップ】

中学・高等学校の英語授業で映像メディアを活用する

飯田泰弘（岐阜大学）

石原健志（大阪星光学院 / 神戸市外国語大学大学院）

坂口朗太（大阪府立大正白稜高等学校 / 神戸市外国語大学大学院）

松田拓之（大阪星光学院）

GIGA スクール構想が始まり、中学・高等学校の英語科教育においても ICT を活用した教育に重きが置かれている。中学・高等学校の教室でも、映像教材を用いることができる環境や設備も整い始め、英語教材としての映像メディアの魅力にも注目が集まっている。また、昨今のコロナ禍で「おうち時間」が増えたことで、日本社会における映画や海外ドラマへの興味関心も高まった。以上を踏まえ本企画では、映画を活用した中学・高等学校での英語授業を推奨し、英語教員が映画を授業に導入できるアイデアやノウハウを提示する。

第1発表者（飯田）は、映画英語の教材としての魅力を紹介する。映画では、英語音声を確認できる、映像を通して物理的距離が把握しやすい、教科書で紹介される英語表現の発展的な用法も確認できる、といった教育上の利点があることを示す。第2発表者（石原）は、中学1年生の英語授業において、映画を活用する案を提示する。具体的には、映画『ハリー・ポッターと賢者の石』を用いて、初期の英語学習者の英語学習を深める目的で、映画を授業に導入する案を示す。第3発表者（坂口）は、英語に興味を示さず、学習意欲も高くない生徒の英語学習に対して、いかに映画を活用できるかを議論する。板書での文法指導が難しいなか、学習動機減退を防ぐには、映画を活用することが効果的であることを、英語の第4文型の学習のケースを用いて考える。第4発表者（松田）は、映画を用いれば、英語作文と英語リスニングの練習を同時に、かつ効果的に行える可能性を示す。大学入学試験に臨む英語学習者にとって、映画を通じた英語の学びも大いに役立つことを、実際の授業実践の例などを交えて紹介する。

- 飯田泰弘「英語教材としての映画の魅力 —英語教科書から一步すすんだ英語を見る—」
- 石原健志「映画のセリフで英文法を学ぶ: 映画『ハリー・ポッターと賢者の石』
中学一年生のケーススタディ」
- 坂口朗太「教育困難校での学習動機をあげる映画の活用 —第4文型のケース—」
- 松田拓之「大学入試対策における映画活用の可能性」